



鯨捕り
金子みすゞ

海の鳴る夜は
冬の夜は、
栗を焼き焼き
聴きました。

むかし、むかしの鯨捕り、
このこの海、紫津が浦。

海は荒海、時季は冬、
風に狂ふは雪の花、
雪と飛び交ふ鰯の縄。

岩も礫もむらさきの、
常は水さへむらさきの、
岸さへ朱に染むといふ。

厚いどてらの重ね着で、
舟の舳に見て立つて、
鯨弱ればたちまちに、

ぱつと脱ぎすて素つ裸、
さかまく波にをどり込む、
むかし、むかしの漁夫たち——
きいてる胸も
をどります。

いまは鯨はもう寄らぬ、
浦は貧乏になりました。

海は鳴ります。
冬の夜を、
おはなしすむと、
氣がつくと——

『金子みすゞ全集』（JULA出版局）

「金子みすゞの世界～こだまでしょうか 仙崎編～」

みすゞの世界が
甦った
感動のステージ

あの感動が再び

10月13日(日)、ルネッサなかと「劇場」で演劇集団 座東京みかん・市民劇団員「金子みすゞの世界～こだまでしょうか 仙崎編～」が上演されました。

これは、香月泰男美術館の開館20周年と金子みすゞ記念館の開館10周年を祝おうと、香月泰男・金子みすゞ共同記念事業実行委員会の主催で開催されたものです。

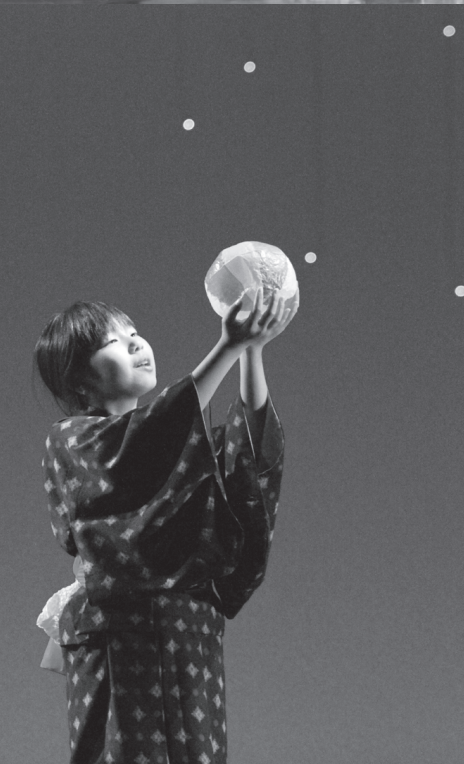
会場では、約700人の来場者が席を埋め尽くし、舞台上に甦った金子みすゞの世界に浸っていました。

この日上演された「金子みすゞの世界～こだまでしょうか 仙崎編～」は、金子みすゞの実弟・上山雅輔氏に師事し

た田辺国武さんが構成・演出した歌と踊りによるファンタジーミュージカルです。

ステージでは、東京で活動する「演劇集団 座・東京みかん」の劇団員と市民劇団員42人が力を合わせて金子みすゞの世界を表現。迫力のあるダンスや子どもたちの素直な演技、透明感のある歌声を披露しました。

公演が終わると来場者は、素晴らしいステージを披露した劇団員に大きな拍手を贈りました。



『金子みすゞ全集』(JULIA出版局)
 こだまでせうか 金子みすゞ
 「遊ぼう」つていふと
 「遊ぼう」つていふ。
 「馬鹿」つていふと
 「馬鹿」つていふ。
 「もう遊ばない」つていふと
 「遊ばない」つていふ。
 さうして、あとで
 さみしくなつて、
 「ごめんね」つていふと
 「ごめんね」つていふ。
 こだまでせうか、
 いいえ、誰でも。



市民劇団員 岡崎 江利子さん

Interview

これからに活かしたい

市民劇団員として、出演できたことをとても誇りに思います。劇団員が一人となつて一つの世界を作り上げることが出来たこと、多くの人に支えられて一つの舞台が完成したことに感銘を受けました。印象に残っている場面は、行商人たちが方言を遣つて語り合うところです。台詞は、一人ひとりが知恵を出し合つて考え、台詞を考えることで、長門弁の良さを改めて実感することができました。ミュージカルを通して、多くの出会い、多くの経験をすることが出来ました。この出会いと経験をこれからの人生に活かしていきたいです。



市民劇団員 宇野 綾夏さん

Interview

10年後も参加したい

私は、みすゞさんのやさしくて心温まる詩が大好きです。そんなみすゞさんの心に触れられるミュージカルに参加できたことは、私にとってとても貴重な体験でした。練習は、とても厳しく、つらい時もありました。特に、「鯨捕り」の場面は、動きが激しく難しかったけれど、一番気に入ったシーンでした。学校や学年、年齢も違う仲間と最後まで一緒にがんばり、最高の舞台をつくりあげることができて、とてもうれしく思います。10年後にこのような機会があれば、また参加したいと思っています。